



Niigata Association of Nursing Care Research

ニュースレター

第 7 号

第 6 回学術集会在開催されました！ テーマ：地域の力をケアに活かす

第 6 回学術集会在地域の力をケアに活かすを を終えて

学術集会长 小林 恵子
(新潟大学大学院保健学研究科)

穏やかな秋の日差しの中で、10月18日(土)に第6回学術集会在を開催することができました。ご多用な中、多くの皆様にご参加くださり、看護への思いを高め、実践・研究を深めることができたことを大変うれしく思います。

特別講演における講師の藤原茂先生の「い・き・る支援」では、私の発想をはるかに超える楽しく、夢のあるケア実践をとおして、人間の生きる意欲や行動を突き動かすものとは何か、プロフェッショナルの支援とは何かを具体的に教えていただくことができました。日ごろの看護に大いに生かせる内容であったと確信しております。

シンポジウムでも様々な方法で地域の力を引き出そうとする取り組みが語られていました。地域包括ケアの重要性が叫ばれている中で、今後も地域にある様々な人たちや資源を活かしながら、健康で暮らしやすい社会に向けて貢献していきたいと思えます。

これからも新潟看護ケア研究学会が新潟の地で地域に根付き、やがて大きな木となり、たくさんの花を咲かせてくれることを祈っております。支えてくださいました、準備委員、実行委員、およびボランティアの皆様、本当にありがとうございました。

最後にこの学術集会在の開催を誰よりも心待ちにし、いつも細やかな心配りをいただきながらも、前日に急逝されました丹野かほる会長のご冥福をこころよりお祈りいたします。



シンポジウム

「地域の力をケアに活かす

—私たちのチャレンジャー—

座長 佐々木 美奈子
(新潟県立精神医療センター)

「地域の力をケアに活かす—私たちのチャレンジャー」というテーマで、佐渡市役所 石井恭子保健師、新潟医療福祉大学 稲村雪子特任教授、大分県の村井恒之特定看護師にそれぞれ先駆者としての活動報告を頂きました。

会場にご参集の方々、まさに地域の力の主役です。その主役である参加者の皆様が、先駆者の報告を聴くことで、ご自身の内に秘めた力を確認する機会としていただくことをねらいとしました。

佐渡市のしまびと元気応援団と称するまちづくり、全国に先駆け厚生労働省の財政支援を味方に付けた在宅栄養ケア、特定看護師による在宅医療、シンポジウムのパワーと熱意に圧倒されながら、迎える超少子高齢多死社会に、生き生きと挑戦されている3人の姿に感銘いたしました。自らの専門職魂に火を灯し、周りの方を見事に巻き込んで、大きい力を創り上げておられます。

参加者の皆様は、自律的に関係者を先導し事を成す姿勢に驚き、多くの刺激を受け、これからの地域の力としての自分の在り様を思いめぐらしたのではないかと思います。この貴重な時間を共有できことに感謝いたします。



～シンポジスト～

あなたの笑顔はみんなの元気～しまびと元気応援団の活動～

石井 恭子（新潟県佐渡市役所）

佐渡市では、市民一人ひとりの声を大切に、5年後 10 年後の佐渡を夢に描いて、市民参加参画で「健康日本 21 計画」の地方計画として「健幸さど 21 計画」を策定しました。「病気減らし」と「元気増やし」の調和がとれた状態を健康な状態とし、特に「ふれあい・生きがい・役割・仲間など、元気を増やすための要因」を意識して健康づくりを推進しています。

人口減少・高齢化が進む佐渡ですが、健康寿命の延伸という観点から見れば、不健康な期間の試算は男性 0.5 年、女性 1.07 年と短く、高齢者が生き生きと輝く生涯現役の島といえます。

計画推進の柱は、自主活動グループ「しまびと元気応援団」です。世代別健康目標達成のための活動を企画し、楽しく活動することで自分が、家族や仲間が元気になる「元気の循環」で佐渡を元気にすることを目指しています。

「しまびと元気応援団」の活動で大事にしていることは、「参画」と「協働」です。9 年の活動でグループ数は 54 に増えました。年に 1 度の全体会と月 1 回の代表者会議で、お互いの多様性を認め合い、納得できるまで話し合い、自己決定と自己責任で活動の方向を決定しています。仲間がいて、やりがいがある活動は生きがいとなり、心身ともに健康になったというメンバーは多くいます。自分たちの活動が佐渡を元気にし、子どもたちが佐渡のすばらしさを知り、佐渡に帰ってきたいと思える、佐渡での暮らしを提案できるような活動がしたいとしまびとメンバーの夢は膨らんでいます。

地域と共に歩む保健師の活動は、人づくりが成功の鍵を握っています。市民と思いを一つにして共に歩む協働のまちづくりを今後も推進していきます。

全国に先駆け始動した「在宅栄養ケア」

稲村 雪子（公益社団法人新潟県栄養士会）

わが国の 65 歳以上の高齢者人口の総人口に占める割合（高齢化率）は、平成 25（2013）年 10 月 1 日現在、25.1%と過去最高となった。

そんな中、(公社)新潟県栄養士会は、平成 24 年度、平成 25 年度と 2 年にわたり厚生労働省の補助事業で計画案が採択され、全国に先駆けて「栄養ケア活動支援整備事業」を推進してきた。そして、幸いなことに平成 26 年度の事業計画も採択された。

平成 24 年度は「多職種連携」と「潜在管理栄養士の発掘と登録」を目標に、新潟県医師会、新潟県看護協会、訪問看護ステーション等、多くの方々のご理解、ご指導、ご協力のもと、全県の 6 か所を活動拠点とした。連携先は、地域の医師会、訪問看護ステーション、地域包括支援センター、在宅介護支援センター、病院、介護老人保健施設等多様で、全県で 32 症例の実施となり、1 つの事業で連携先による課題の違いが明らかになった。

続いて、平成 25 年度の事業の柱は、在宅療養者の栄養課題を共有できる病院の管理栄養士と在宅訪問管理栄養士（栄養ケアステーション）が連携し、在宅療養者の食における QOL の維持・向上を目指した在宅訪問栄養ケア新システムを試行することであった。つまり、「同職種連携」である。しかし、現実には厳しく、多くの課題は残ったが、42 症例を経験することができた。

そして、この 2 年の経験を生かした平成 26 年度は、かかりつけ医の指示による「在宅訪問栄養指導」実施のための手順書・契約書を作成し、保険制度を運用した在宅訪問栄養ケアシステムを一日も早く構築し、稼働させることが目標である。

今後も、ヘルスプロフェッショナルとして、対象者のニーズに耳を澄ませ、地域の人に寄り添いながら、その人の生活の中で、共により良いあり方を考えて、本当に必要なケアを心がけていきたい。

在宅療養支援の取り組み

村井 恒之（特定看護師）

私は「もっと自律的に活動できる看護師」を目指して大分県立看護科学大学大学院 NP コースを修了、特定看護師として在宅を中心に活動を行ってきました。在宅では看護師個々の能力が利用者の QOL・QOD に反映されやすい側面があります。昨今の超高齢化に伴い、今まで以上に高度できめ細かい看護実践力や現場判断力が求められます。

このような現状の中でフィジカルアセスメント・病態生理学・薬理学といった evidence に基づく治療的

視点と対象者・ご家族の「病いの語り」=narrative を大切にしたケアの視点、両方の視点から対象者とご家族をサポートすることが重要になります。褥瘡の事例では、在宅移行のために多職種との連携強化を行いました。また、デブリードメントや薬剤調整といった包括的指示のもと客観的指標を用いた治癒評価を行い、処置の妥当性を可視化できるようにしました。その中で在宅で可能な最善の処置施行と同時に対象者・ご家族の置かれた社会的・心理的背景を理解しサポートすることの重要性を学ぶことができました。施設入所者に対する状態悪化時の事例ではどのようにアセスメントを行い臨床推論を構築するかといった思考過程を示し、客観的根拠に基づいた処置につなげる方法をお話しました。在宅での活動の中で医学的な知識・技術とともに対象者・ご家族がこれからどのように「病い」と向き合っていくかを支えるコミュニケーション能力、倫理観、想像力といった視点が必要で医学的視点と生活者としての視点両方を偏りなく駆使することがこれからの在宅療養を支える特定看護師として必要な能力であると考えています。



口演発表

口演発表の座長を終えて

座長 久保 敏郎 (新潟保健医療専門学校)

新潟看護ケア研究学会長の丹野先生との出会いは、日本看護協会の看護教育学会準備委員会からでした。準備委員長としてパワフルに意見をまとめられ、朱鷺メッセでの学会を大成功に終わることができ、大変喜ばれているお顔は忘れられません。今回の新潟看護ケア研究学会も大成功に終わることを心から願っておられたと思います。私も微力ながら成功させなくてはと心が引き締まる思いで務めさせていただきました。

発表は 7 題あり、看護の質向上を図るための活動

や患者の個別性に対応する看護の工夫、教育力向上の取り組みなどに力を注がれたことが伝わってくる報告でした。質疑応答においても学生より最初の質問が出るなど演者と会場とが交流できたと感じております。また、演者より対象者との関係性の発展の様子や現場の課題などがリアルに伝えられ、発表内容がより深まり、参加者に伝わったのではないかと感じております。ここでの学びが、新潟の看護ケアの発展につながっていくことを心から願っております。

～口演発表を終えて～

星 礼子 (医療法人水明会 佐潟荘)

この度は、新潟看護ケア研究学会に参加する機会をあたえて頂き、ありがとうございました。看護師になり 26 年、20 代の頃は学習意欲もあり前向きに看護にも研究にも取り組んでいましたが、年を重ねるにつれ目先の業務をこなすことで精一杯。自ら進んで研究をやってみようなどという気持ちは正直、微塵もありませんでした。しかし、今回研究指導者として共同研究者に名を連ねた甲田さんから「日々実践してきて、これだけ成果が得られたことをまとめないのはもったいない。あまりむずかしく考えず自分たちの看護の振り返りをするつもりで発表してみませんか？」と声をかけられたことで、前向きな気持ちを思い出すことができ、今回の発表の日を迎えることができました。

また、他の分野における現在の看護の情報も知ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。分野は違っても、対象者の笑顔を見るために現場は日々試行錯誤していることを再認識しました。今回得た学びを忘れずに、取り戻しつつある前向きな感情が継続していけるよう今後も努力していきたいと思います。最後に、未熟な私達を根気強くご指導下さいました甲田さんをはじめ、本研究にご協力下さいました皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



示説発表

示説発表の座長を終えて

座長 坪川 麻樹子 (新潟医療福祉大学)

新潟看護ケア研究学会は、様々な領域が集まったの
学術集会です。対象は小児から老年、精神や地域な
ど幅広く、自分の専門外のことは無知であることに
多少衝撃を抱きましたが、臨床の方々がいろいろな
疑問を持ち、それらを明らかにしていこう、今後の
看護に生かしていこうという思いをひしひしと感じ
ることができる示説発表でした。

質疑応答では、質疑が出ないかもしれないと心配し
ておりましたが、そのような心配も不要で、活発に
意見交換がなされ、参加者の意欲の高さを感じまし
た。また、質疑応答が終わってからでも発表者の方
へ質問・意見交換などをなされている方を多く拝見
し、看護職はもともと勉強熱心と言いますが、本当
にその通りだなと思いました。

私自身、このような役割を与えられたことが初めて
で、一番緊張していたかもしれません。しかし、発
表者の皆さんや参加者の皆さんのおかげで無事終
えることができました。ありがとうございました。

今後も新潟の看護の質の向上に少しでも貢献でき
ればと思います。

～示説発表を終えて～

五十嵐 結香 (済生会三条病院)

今回、新潟県看護ケア研究学会に参加することとな
り、初めて参加する学会という事もあり、学会の雰
囲気や参加人数などが分からずに不安がありました。
また、今まで院外での研究発表の経験もなかったた
め、発表までの抄録の作成などの面でも心配があり
ました。しかし、抄録作成において繰り返し修正の
アドバイスを頂き、無事に完成させることができま
した。本当に感謝しています、ありがとうございました。
学会での発表はとても緊張してしまいましたが、無
事に発表を終えることができ、ほっとしています。
参加者の方から積極的に質問を頂き、その後
に様々な意見を交わすことで、自分自身の学びも深
まったと思います。また、他の研究発表もとても興
味深いものが多く、とても刺激となりました。今回
の発表で学んだことをまた日々の勤務で活かしてよ
り良い看護を行って行けるようにしていきたいと思
います。ありがとうございました。

参加者の声

第 6 回学術集会に参加して

袖山 悦子 (新潟医療福祉大学)

新潟看護ケア研究学会の開催日は、例年私の所属す
る大学の学会と重なり、出席することが叶いません
でしたが、今年度は、開催日が異なりようやく出席
することができました。学術集会の開会では、学会
長の丹野かほる先生の訃報に、驚きました。先生
のご冥福をお祈りいたします。

今回のテーマは「地域の力をケアに活かす」でした。
世界に例を見ない速さで進んだ日本の高齢社会で、
私たちが「よりよく生きる」ためには、自らが積極
的に社会資源を活用して、元気に生きていくことだ
と思っています。

藤原茂先生の「人生に定年はない」、「心が動けば身
体が動く」はとても印象に残りました。団塊の世代
の定年後の関心ごとは、経済（お金）、健康、生きが
いと豊かな老後の 3 要素と一致しています。このパ
ワフルな団塊の世代は、新しい高齢者の生き方を見
せてくださるのではないかと期待しています。

術集会の開催、創刊号の発刊と役員の皆様のご努力
に感謝申し上げます。

第 6 回学術集会に参加して

船山 稚葉

(国際メディカル専門学校看護学科 3 年)

この度、第 6 回学術集会に参加させて頂き、看護領
域の広さと、様々な視点から看護を考えることがで
きてとても価値のある有意義な時間を過ごすことが
出来ました。

超高齢社会が進んでいるということは、人々の健
康寿命が伸びているということで、それ自体は大変
喜ばしいことだと思います。しかし、高齢者は一般
に様々な疾患を抱えており、医療に依存しながら生
活している方がたくさんおられます。また、高齢に
なると様々な健康リスクを伴い、一度でも致命的な
病気を患うとその後、自立が困難な状態になってし
まいます。「い・き・る支援」の講演や地域で暮らす
人々を支える取り組みを今回学ばせていただきました。
たとえ病気になったとしても高齢者が住み慣れた
地域で最期まで生き生きと生活するために医学的
な視点、身体のアセスメント、そして生活者として
その人が持っている能力を組み合わせる暮らしを支
えていくことが看護師の大きな役割と言えるのでは
ないかと自分の考えを深めることが出来ました。

初代会長 丹野かほる先生を偲んで
事務局長 関井愛紀子

2014 年 10 月 17 日（金）
17 時 08 分に、新潟看護ケア研究学会の会長丹野かほる先生がご逝去されました。突然の出来事でした。この日は設立当初から悲願であった「新潟看護ケア研究学会誌」創刊号が完成し納品された日でもありました。「巻頭言」を読み会長の思いが詰まった学会であったことを改めて知ることができました。会長は「臨床と教育のコレボレーション」を学会の柱に据え、臨地に潜在する実践智に光を当て学会発表につなげる研究指導を精力的に行っていました。企画運営に関わる会議では、新潟県内外の看護職の方々と年代や職位を問わず積極的に交流を持っていました。時には議題から離れ国際看護学の立場からエジプト・トルコ・ヨルダンでの母子保健活動や国際交流で学生と訪問したミャンマーの看護事情など異文化に触れる機会を得ることもできました。学術集会に参加された方々は会長の穏やかで包容力のある人柄とその笑顔の思い出されることと思います。いつも、研究室のドアには大好きなひまわり畑の中でたたずむ会長の笑顔がありました。しかし、今はもう見ることはできません。でも、皆さんの脳裏にしっかり焼き付いていることと思います。プリーツ・プリーズ（I S S E Y M I Y A K E）の服装と共に。



会員と共に、学会の設立および今日までの発展に尽くして頂いた故丹野会長のご冥福をこころよりお祈りいたします。ありがとうございました。合掌。
追記

亡くなる 3 日前、学会の成功を祈り会長の大好きな「大翔龍」で楽しいひと時を過ごせたことも思い出となっています。

創刊「新潟看護ケア研究学会誌」に寄せて
学会誌編集委員 渡邊 岸子

学会誌の創刊は、本学会の設立当初からの念願であった。故丹野かほる会長が編集委員長を務められ、数年前から創刊に向け準備してきた。奇しくも創刊号の納品は、ご逝去当日の平成 26 年 10 月 17 日であり、翌日の第 6 回学術集会当日に発刊となった。創刊号には、多くの論文を掲載したいという編集長の思いがあり、発刊を延ばしていた。結果として、原著論文 2 編、研究報告 1 編、短報 1 編、資料論文 1 編、実践報告 1 編を掲載できた。さらに編集長は、国立国会図書館に ISSN 登録手続を済ませており、本年 2 月に正式通知書が学会事務局に届いた。ISSN とは国際標準逐次刊行物番号であり、学会誌の表紙に記載されている。編集後記には「これからも会員の皆様の手で、この学会誌を育ててくださいますようお願い申し上げます(丹野かほる)」と記されている。第 2 号は、平成 27 年 10 月 17 日に発行予定である。初代編集長の遺志を継ぎ、会員の皆様には、ホームページの投稿規定に則り、投稿されることを期待しています。

研修企画「看護研究セミナー」を終えて
企画担当 渡邊タミ子

今年度の事業計画の一環として初めて研修名『看護研究セミナー』を、第 1 回（9 月 27 日）・第 2 回（10 月 11 日）・第 3 回（11 月 15 日）の日程で開催した。そのテーマは、「初心者のためのやさしく学ぶ 看護研究の進め方—よりよい看護ケアのために—」で、主な内容は下表に示したとおりである。この研修への参加希望者は延べ 65 名で病院看護師がほとんどであった。受講動機として「今、看護研究を行っている」や「これから看護研究に取り組む予定」が多かった。一部の回のみ受講者もいたが、全回とも受講する者も多かった。受講後のアンケート結果は、「非常に参考になった」「参考になった」の回答が多かった。全体的に概ね好評で、「研究についてとても勉強になった」「本だけでは得られないところが説明されてとてもよかった」等の反応があった。ただ、一部時間配分や媒体への改善を求める意見が出され、今後の課題として残った。

平成26年度看護研究セミナーのプログラム 於：新潟大学医学部保健学科・自習室

項目	9:00-10:30	講師	10:45-12:15	講師
第1回	看護研究と研究課題	渡邊タミ子 新潟大学医学部保健学科	看護研究と文献	成澤幸子 新潟大学医学部保健学科
第2回	研究計画の基本	関井愛紀子 新潟大学医学部保健学科	主な調査方法	成田太一 新潟大学医学部保健学科
第3回	看護研究と倫理	渡邊岸子 新潟大学医学部保健学科	抄録作成方法 と発表方法	渡邊岸子 新潟大学医学部保健学科

第 6 回学術集会（平成 26 年 10 月 18 日開催） アンケート結果

学術集会参加者は 240 人、アンケート回答者 154 人、回収率 64%であった。プログラム全体・特別講演・シンポジウム・演題発表について「とてもよい」「よい」の評価が多く、概ね良好な結果であった。

プログラム全体については、運営がスムーズでよかったという意見の一方で、演題発表の口演と示説が同時進行のために「関心のある演題に参加できない」という意見があった。演題数が増えるに従い、口演と示説は同時進行にせざるを得ない。改善点として、各演題の発表時間をプログラムに明記し、移動の際の目安を示す。また、口演と示説の両方に参加希望の方には、各会場に移動しやすい席を確保していただくことを提案したい。

特別講演については、「生きる支援は楽しく参考になった」「真のリハビリや生活支援が行われていて感動した」「高齢者の生きる力を支えるための手がかりがあり、急性期病院でも活用できる」「制限ばかりでなく、できそうだという視点を持ち、近くで見守りからはじめるかかわりが大切」等の記載があった。「同僚等にも知ってもらいたいので、要旨だけでも講演内容の資料があるとよい」という希望があり、次回に活かしたい。

シンポジウムについては、「自分が知らないところで精力的に活動していることに魅力を感じた」「看護職でない職種(管理栄養士)の話聞くことも貴重な機会であった、管理栄養士への期待は大きいと感じた」「特定看護師の在宅支援の取り組みに関心をもてた、わかりやすく興味深かった」等の記載があった。進行については、「質問や感想がいえる時間ももっとあるとよい」という意見があり、次回の運営に活かしたい。

演題発表の口演については「演題ごとに質問時間が設けられ質問しやすい」「現場のことをより詳しく聞けて参考になる」という一方で、「発表者の声がかもっていた」「発表の仕方に抑揚があるとよい」等があり、学会側の音響設備の確認と共に、発表者の発表方法の工夫も必要といえる。示説発表は、「日々の看護の参考になった」という意見の一方で、同じ会場で 2 群の発表があり「他の発表が聞こえて集中できない」「できれば別の部屋がよい」という複数の意見があった。「質疑応答が活発になるとよい」という意見があり、次回に活かしたい。

全体については、看護職以外の職種の参加が複数人あり「臨床の場で患者のそばで活躍している看護師とともに患者のことを共に考えていける医療職でありたい」とあり、看護職からは「看護職と連携のある医療職の発表をさらに聞きたい」という意見があった。看護学生の参加が多く「学生のうちから学ぶことができ、よい勉強になる」があった。「事前に抄録集を配付してほしい」「受付がもう少しスムーズに行えるとよい」等の意見があった。最後に「新潟看護ケア研究学会の特色があるとよい」については、本学会は、臨床の実践報告と研究発表、臨床実践と教育活動、看護職と多職種とのコラボレーションを目指して学会運営を進めてきた。今後のあり方については、学会員と共に創りあげていきたいと考えており、会員から多くの意見をいただくことを期待している。

～事務局よりのお知らせ～

1. 「第 7 回学術集会」の郵送について

県内全ての病院、看護系大学・専門学校、訪問看護ステーション、保健所には郵送しております。配属部署にない場合は病院や施設の看護管理者にお問い合わせ下さい。

2. 学会ホームページについて

ホームページに学術集会関連情報を掲載しています。また、学会等の資料、入会用紙もダウンロード可能です。ご入会をお待ちしております。HP：<http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/>

第 7 回学術集会のご案内 日時：平成 27 年 10 月 17 日（土） 会場：新潟大学医学部保健学科

テーマ：看護ケアに生かすキャリアデザイン

学術集会長 佐々木 美奈子（新潟県立精神医療センター看護部長）

特別講演：看護ケアに生かすキャリアデザイン 講師 手島 恵（千葉大学大学院看護学研究科教授）

シンポジウム：生き生き働き続けるために 大切なこと

編集後記

平成 26 年度の新潟看護ケア研究学会が終了して早くも 4 カ月が経過しました。それはすなわち丹野かほる先生が急逝して 4 カ月が経過したという事です。今でも謙虚で自然体な丹野先生を思い出すと胸が熱くなります。私達が成長していく姿を見せていくことが、先生に対するご恩返しになるのではないかと改めて感じます。【広報担当 K】

新潟看護ケア研究学会 事務局

〒951-8518 新潟市中央区旭町通 2-746

新潟大学医学部保健学科内 関井研究室

Fax : 025 (227) 2637

Mail : a-sekii@clg.niigata-u.ac.jp

HP : <http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/>